

「千と千尋の神隠し」の连接的物語論

角 田 巖*・佐 藤 崇**

The Junctive Narratology in “Spirited Away”

Iwao Tsunoda, Takashi Sato

I 基底連接 basic junction

本稿の物語論における「連接」とは、行為者 actor の離接的状況から合接的状況への一連の連鎖のことである。「離接」disjunction は、言語学上では「XはYとともにあらず」、ないし「XはYを持たない」という状況を指す。「合接」conjunction はその逆である。本物語論においては、離接は離散の、不連続の、未然の、未踏のいまだ至らない、未決定のあるいは非本来的、潜在的状況ととらえる。一方、合接は接合、連続、到達、決定、本来的、顕在的状況を示す¹⁾。そして、連接は、両者間の時間的経過と因果的關係を含む結接を表している。

基底連接は物語を構成する上での最も根幹をなす連接であり、物語の開始～展開～終結を形成する。基底連接の範列的状態は

〔不整合〕—〔転換〕—〔整合〕

である。

すでに、ダンダスは北米インディアン民話の研究において、物語の構造が「不均衡から均衡への移行ということから成り立っている」²⁾と指摘している。不均衡は、恐るべき、回避される状態、又は切望される欠乏の状態ともみなされる。開始の状況では、物語の設定環境や主体の心的状況が物語の関係性という観点から整合していないのである。物語は、この不整合な状況（離接）を物語としての望まれた未来的な状況（合接）へと整えるために時間的経過をたどる。転換は、不整合な状況から整合の状況へと向かわせしむる因果的アルゴリズムのために存在する。物語の前半では主体の願望は、力、知、状況において充溢していないために満たされ得ないが、この力、知、状況を獲得していく経過が不整合を整合へと転換させていく。

「千と千尋の神隠し」の物語の基底連接は、異界に侵入し、八百万の神々に用意された食事を無断で食べて豚になってしまった父母をかかえ込んだ主体の困惑した状況（不整合）を、勇気を

* つのだ いわお 文教大学人間科学部

** さとう たかし 文教大学生生活科学研究所準研究員

奮い起こし様々な援助を得ながら努力し（転換）、父母を元の姿に戻す（整合）という構造である。ごく常套的なファンタジーの物語である。この物語は、ファンタジーへの入り口と出口の標識であるトンネルをくぐって異界に入る。そこに、物語の主要な行動の典型である範列的な「機能」の一つ、〈禁止〉vs〈違反〉という開始のシークエンス接続 sequence junction を根拠づけるためにやや長い導入部を設定している。この導入部は、単に物語の開始の事由を説明しているだけでなく、状況の重大な変化を伴う出来事の時間的経過を綴っている。いわば、最も基礎的で、簡略な物語の体をなしている。場面は、千尋と父母が新しい住居へと向かう引越し中の自家用車での移動である。主体の心的状況は、主体のふてくされた言動、うるおいを失いかけつつある花束とカードによって、転地への不安が描かれている。同時に、以前の生活や学校での様子、別れの会などが推測され得る。そして、終結部において、主体の不安は拭い去られ、新しい生活と転校地へと向かう勇気が彷彿している。過去と未来は描かれていないが、移動中という現代進行の描写によって一つの物語としての出来事（旧生活—引越し—新生活）が存在している。小規模ではあるが、旧生活を離れるという不整合の状況から新しい生活を築いていくという整合の状況があり、この転換をなすのが移動中におきた壮大な出来事である。一方、ファンタジックな物語の基底接続は、一連の生活変動の出来事に嵌め込まれた物語としてとらえることもできる。生活変転の現実的物語は、ごくありふれた少女の起こり得る出来事であるが、この物語のマクロテーマの一つとして重要なディスコースとなっている。宮崎駿は、この物語の主人公について何か特別な能力や謂れを持っていなくても、ごく普通の少女が何かの厳しい状況に立たされたときに意外な適応力と強さを発揮することができるという「そのくらいの力をみんな持っている」³⁾ というメッセージを描きたいと述べている。

それ故に、生活変転の現実的な出来事は、主体が知と力を培って対象を得るという一般的な「成長物語」ではない。しかしながら、現実的物語に組み込まれたファンタジーの出来事があまりに重大で強度が高ければ、たとえ時間的経過が短くても、大いなる成長を成し就げることも可能となる。子どもの発達は、次のステップへ進む契機として危機があるが、危機は多く日常的であり、かつ頻度の多い出来事からもたらされてくる。また危機は精神的葛藤であり、発達は自らこの葛藤を乗り越え、克服することによって実現されてくる。そこには、すでにさらなる発達への潜在的な可能性が存在していて、危機において発揮される適応力、精神力は、これまで培われてきた資質と勇気の実現である。出来事との遭遇がなければ、それらの力は潜在化されたままである。それ故に生活変転の出来事は、重大な危機を乗り越え、自己を実現していく発達のディスコースが一面にある。

さらに、現実的な出来事と非現実的な出来事が対比的に連結しているところから別なディスコースを捉えることも可能となる。現実的出来事を意識とし、非現実的出来事を意識下とすれば、深層心理のディスコースが描かれる。河合は、日本民話の範列の一つである「見るな」の物語を意識と無意識の往還と捉え、そこに日本女性の「恥」の精神を見た⁴⁾。また、非日常的出来事に生じてくる様々な名前の消失や実体を持たない行為者（カオナシ）は、主体の場における見えざる他者との相克というラカンのディスコースを照射させたくもなろう。その他、現実界と異界という対比でとらえれば、原風景として内在するアニミズムや靈魂から生じてくる生命のディスコースが浮上しよう。この物語では、通例的なファンタジー構造を基底接続とすることで、虚構の世界として見るサスペンスと安堵感を与えている。同時に、基底接続の上に現実的な出来事の物語を構成することで、物語全体が主体としての少女の生き方を描くことを可能としている。

II プログラム接続 program junction

プログラム接続は、基底接続からさらに物語構築の実現に向けて駆動させていく接続である。
基底接続

〔不整合〕 — 〔転換〕 — 〔整合〕

の構造は、主な探索物語構造において、

(欠落) — (試練) — (欠落の除去)

を構成する。古典的探索物語では欠落は失われたものの探索であり、近代的な物語では主体の内的な喪失感(例えば伴侶の欠落の認識)から来る欠落を埋めて、新たな人格の充溢を目指す探索である。

一方、救済物語構造では、

(迫害) — (試練) — (修復)

となり、開始の不整合は存続していた秩序の崩壊であり、その復活が物語の整合となる。転換部は何れも主体の成長を飛躍させるもので、力、知を増強するために主体の試練が続く。

「千と千尋の神隠し」の物語では、欠落は八百万の神々のための食事を貪り喰って豚になってしまった両親の救済であり、欠落の除去は元の父母の姿に戻すことである。試練は、援助者を求めること、油屋で仕事を湯婆婆から手に入れること、父母の救済の術を見出すことである。

この物語は両親の救出というプログラムAが中心ではあるが、さらに重層的、対位的なプログラムBを添付させている。千尋は、両親を助けるためには異界に生きなければならないことをハクという青年から教えられる。この時点では、ハクは「主体」千尋の行為項(物語の行為者の範疇的典例)「援助者」である。しかしハクから手厚い援助を受けた千尋は、ハクへの感謝に満ちて、ハクの危難の救出に全力をあげる。物語はここからハクが単なる援助者だけではなく、ハクもまた一つの行為項主体であり、千尋とハクはお互いに協力し合ってそれぞれの対象を求める「主体」・「協主体」となる。この流れは、両者の深層の記憶に邂逅を持つ、深い縁に結ばれた出逢いのディスコースを綴る。このプログラムBは、(迫害) — (試練) — (救出)となる。このプログラムは、基底接続のプログラム(父母の救出)と直接的な連結を持っていない。ハクは前半において大いに千尋を援助するが、後半はむしろ千尋がハクを救出することになる。基底接続のプログラムはファンタジーという物語の構造上の意義を担っているのに対し、プログラムBは物語のマクロテーマを打ち立てるのに重要なプログラムになっている。

プログラムの概略を明らかにするために行為項に基づく関係を例示する。

(行為項) actant

主体: 対象への願望、信念を実現する者

対象: 主体が目指す願望、信念の目的となるもの

反主体: 主体とは異なる願望、信念を持ち、しばしば主体と対立する

協主体: 願望は主体と異なる場合もあるが、信念や価値を共にする協力者

援助者: 主体や協主体を助け、その実現を援助する者

反対者: 主体や協主体の目的実現を妨げる者

同行者: 主体や協主体と行動を共にし、援助もするが、時に足手まといともなり、物語や信

念を混乱させる

〈プログラムAの行為項〉父母の救出を目指す基底連接で、ファンタジー構造をもたらす。

主 体：（千尋）
対 象：（父母の救出）
反主体：（湯婆婆）
協主体：（ハク）
援助者：（釜爺、リン）
同行者：（カオナシ、坊・坊ねずみ、ハエドリ）

〈プログラムBの行為項〉ハクの救出を目指すプログラムで、宿命の出逢いのディスコースを描く。

主 体：（千尋）
対 象：（ハクの救出）
反主体：（湯婆婆）
協主体：（ハク）
援助者：（釜爺、銭婆）
同行者：（カオナシ、坊・坊ねずみ、ハエドリ）

III 意味論的連接 semantic junction

1. 変容する欠乏

千と千尋の神隠しの物語では、多くの個性豊かな行為者が存在する。それぞれの行為者は自らの対象を持っているが故に一つのディスコースを描き得る。対象に向かう行為者の願望には様々な行為の意味が潜在している。満たされていない願望は離接の状況であり、願望が満たされれば合接に至る。この願望は意味的な連接を構成している。

まず、主体千尋はプログラムにおいて両親の救出をめざしている。千尋は何としても両親を元の姿に戻さねばならないという切迫感におおわれている。主体の状況は心的欠損にあり、阻外されている。そして終局において欠損の状況は回復し、秩序が回復される。プログラムBでは、ハクの無謀な欲求と傷害に千尋は心を痛め、ハクの犯した行為の救済に向かう。そしてハクの名をよみがえらせることでハクを救出する。ここには欠損状況～修復という連接がある。さらに、千尋は湯婆婆との雇用契約時に、本来の名前を剥奪され「千」という源氏名に変えられてしまう。しかし、旧友たちから贈られた花束に添えられているカードに書かれた「千尋」の字によって自分の名を思い出す。ここにも忘失からの還帰がある。ハクにおいても同様に喪失した名前のリコールが自らの再生につながる。主体と協主体は、欠損という離接状況からその修復という合接状況へ意味論的連接を変容させていく。主体の対象への願望の成就への道程は、物語の落差とサスペンスを綴る。主体はその落差という時間を生きる。主体たちは欠落から再起をめざし、忘却の無意識をさ迷い、絶え間ない試練を生き抜く。そこから勇気が生じ、思いやりの気持ちが湧き起こり、そして限りない、惜しまない贈与の情念（共一パトス）が浸透していく。

2. 変容しない過剰

千尋たちが侵入した地は異界である。八百万の神々が癒やされる温泉地のようなもので、油屋と称される湯屋がある。この館の主人が湯婆婆であるが、湯婆婆はカエルやナメクジの化身を搾取して有り余る富を築いている。この富は、雇人の他に湯水のごとくと例えられる溢れる湯と倉庫に貯えられている豊富な食料によって成り立っている。湯婆婆はがめつい主人ではあるが、神に仕える以上悪人ではない。だから、行為項〈反対者〉ではなく、主体と異なる信念と価値をもつ〈反主体〉なのである。ファンタジーの多くが善と悪、防衛者と侵入者、剣と魔という対立的な価値観に基づく二元的対立を扱っているのに対し、この物語では状況的、状態的二元対比によって構成されている。主体たちは欠落と欠乏を生きねばならないが、反主体は過剰な富と財と飽くなき欲望を求め続ける。両者は使用人対使用者であり、使用人は使用者の算段の中で自らの対象を実現していかなければならない。いわば、現社会との近似的な社会関係の対比が存在している。余剰が過剰を生んでいくシステムの中で欠乏と欠落の脱出をはかること、これが両者の対立である。この対立を愛（無償性）と欲（実利性）との対立としてとらえることはできない。何故なら、湯婆婆もまた自分の息子、坊へは献身的で過保護の愛情をこれも湯水のごとく注ぐのである。反主体は常に過剰なのである。そして、この対比をどのようにとらえていくかが、この物語の生産、創出のカギとなるであろう。

3. 変容する過剰

主役たちの必死の姿は、行動を共にするものたちも変容させていく。異色の脇役であるカオナシは、千尋に引き入れられ魅せられていく。カオナシは、自身の顔と声を持っていない。このアイデンティティの虚ろは、どのようなものでも飲み込むことで、どのような他者にでもなるという過剰な他者性である。また、魔法によって無尽蔵に偽りの金を取り出す。さらに、空胞な内臓は食欲であり、際限なく呑み込み、膨大な不消化物を嘔吐する。やがて、すべての過剰物を吐き出し、再び空になったカオナシの内部と内面は、魅せられている千尋の内面へと向かう。そして、千尋と同行することで千尋の素直で、穏やか、かつ芯のある精神性を自身の内面に染めていく。

過剰のシステムの伴隨者も同様に過剰である。湯婆婆の怒涛の愛情と過保護にさらされている坊は巨大な肥満児である。自分の欲望を満たすまでは決して要求を止めない。それは過剰な欲望であり、その結果である。彼は、欠乏と欠落、欠損を知らない。しかし、坊は銭婆によって坊ねずみに気まぐれに変えられてしまうことで、欠損状態になってしまう。人間の身体が変貌し、肥満な身体は極度に縮小してしまう。小さなねずみへの変容は、閉じ込められた室内から外の世界への冒険を可能にさせる。坊にとっての変容は、新しい人生への投企をもたらし。それは、自ら歩くことであり、赤ん坊から少年への旅路であり、友という存在があることを知る世界の開示である。

過剰からの変容は、物語中のエピソードにおいても出現する。油屋にオクサレサマという歓迎されざる神が現れる。千尋は、この途方もない神に接客することになる。オクサレサマは、汚物に塗れ、臭気が立ち込めている。湯中の身体から突き出る自転車のハンドルを引き抜くと猛烈な垢の中から川に捨てられたような粗大塵芥が出てくる。全てが恐るべき過剰の排泄物である。健気に立ち働いた千尋に丸薬を残して、オクサレサマは一筋の清楚な輝きを放って、一陣の風の龍のように立ち去る。その姿は濁りが消えた循環する山水のように流麗である。オクサレサマは人

間界の廃棄物にまみれて疲労困憊して、油屋に癒しにきた川の神のマレイトである。

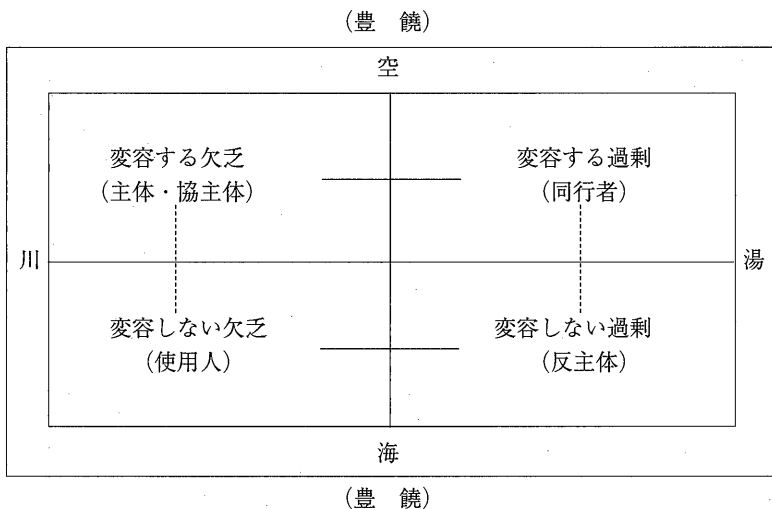
湯婆婆と姉妹である銭婆もまた本来は過剰な存在である。魔法は非合理であり、存在の超越である。秩序からはみ出しているものとして、過剰なのである。しかしながら、物語の進行と共に、銭婆は湯婆婆に命じられたハクに印章を盗まれる。また、何故か浅い海の孤島のような辺地にひっそりと住んでいる。彼女もまた妹の行いに痛める心の欠損を抱いている。そして千尋とその同行者を受け入れ、ハクを許す。銭婆は、異界と人間界との境界に位置する存在で、ささやかではあるが、物語における人間と霊との調停者の役を果たす。海を渡って、この地を過ぎる電車の名称が「中道」であるように、銭婆は欠乏と過剰の中庸を生きているように見える。

4. 変容しない欠乏

最後に状況が搾取されていたり、疎外され欠乏の存在である行為者群がいる。これらは、油屋における使用人、即ち湿気を好むカエルやナメクジ等の化身である。そして特に目をひくのがリンという人姿の女性である。リンもまた、名前を剥奪され、意志はあるがもはや帰る、戻る術を持たない。釜爺もまた薄れた記憶しかなく、かつては戻るための片道切符をおぼろげな記憶を辿って探し出し、千にあげる。彼らはもはや戻ることは出来ず、定めのまま生きていかねばならない。やがて、欠乏の状況すら意識できないかもしれない。遠浅の海を行く電車の先がどこへ行くのか不明ではあるが、彼らの戻る先への可能性があるのかもしれない。彼らにとってもはやその先は空漠な暗に過ぎない。変容しない欠乏の存在者たちは、富の横溢に従属せざるを得ない。

5. 豊饒

過剰は過ぎたるは及ばざるがごとしであるが、豊饒は超越的価値である。異界の油屋には溢れている湯がある。八百万の神々への捧げものの一つである豊かさである。一方、異界には森が欠如しているようである。森は人間界の自然の豊かさである。しかしながら、湯も森も限りないものではない。異界においても人間界においても真に豊饒なるものは、空と海である。これらは永劫の時間であり、全てを包み込んでいる。ハクは川の主であったが、幼い頃に川に落ちた千尋は



この川の主に抱きとめ、包まれて生命を助けてもらう。遠い記憶が甦る。川は海の支流であり、ハクも千尋も永劫の時間の流れの中に在る。異界を包む海はおそらく人間界の海と繋がっているであろう。空もまたハクと千尋を抱き包み、二人は空を自由に駆ける、空は、二人の過去と現在そして未来を開放している。

行為者たちの行為と状況、環境は意味論的に表のように構成される。

IV 標識 mark

標識は、言語学においては単数・複数、性、固有名詞等を表す記号上の要素である。物語論では、グレマスのイゾトピー isotopy、エーコのトピック topic のように意味を辿っていく上で冗長的な指針となっている。また、物語のマイクロテーマやマクロテーマを探ったり、産出していくときの手がかりともなる。時に物語の深層の意味やテーマを掘り上げるこれらの標識には、「離脱性」、「侵犯性」、「横断性」、「変形性」といった記号分子が強調される⁹。

この物語において、重要な標識は、まず第一に名前の欠落である。湯婆婆は雇用契約書に書かれた被雇用者の本名を奪い取り、代わりに略名、源氏名を与える。「萩野千尋」は、「千」という名に変えられてしまう。「千」という字が数字の1000にも読めるように、隷属と言う標識になってしまう。管理される者は数字化される。また、ハクも本名を奪取され、今はこの異界を出る術を失っている。本名を忘失した者はここを出ることが出来なくなってしまうからである。ハクの場合は数字ではなく、略名である。使用人の父役、兄役という役職名もまた組織としての符号である。

人名はその意味によって翻訳されないし、他に置き換えることが出来ない何かを固執していると言われる。日本のある主要メディアは、中国人名を日本の漢字音で発音するが、この音は決して中国では通じない。名前はアイデンティティの一つである。

湯婆婆の雇用戦略は人格を一つの労働力として規格化することである。労働力としての体さえ魔法によって豚等のような商品、材料に変えられてしまう。千尋は、かろうじて以前の学校のクラスメートから贈られた花束に添えてあるカードに書かれた名によって自分の名を取り戻す。千尋は、友だちの偶然な支援に支えられている。ハクもまた千尋の記憶の呼び戻しによって自分の名を思い出す。

名前を失わないことが脱出の前提となっている。名前には家族が、係累が、出身が、身分が、国が刻まれており、名を失うことはまたそれらを失うことになる。しかし、名前を失っても自身の人間性を失うことではない。むしろ自分を被っているペルソナの内にこそ人間性があるとも言える、千尋は人間性を失わなかった。かえって逆境の最中で千尋の内面性が滲み出てくる。千尋の勇気が、忍耐が、誠実さが、人への思いやりが、深い愛が。どんな時にも人は人の本性を失わないこと。むしろ、逆境の時にその真性が問われること。このことが、名前という存在の揺らぎに明証される。

次に欠落している者に、カオナシの存在がある。カオナシは自らの顔と声を持たない。他者を呑み込むことによって、この他者の声によって話すことができる。このファンタジーの中では奇妙な恐ろしい存在者である。突きつめていけば、人の内なる他者性の問いへと向かう。逆に言えば、カオナシの存在は空虚と言え。食べても食べても尽きない食欲。次々とにせの金を放出さ

せる魔法。この過剰性は無から生じる氾濫であって、その過剰の放出もまた無である。千尋の「私がほしいものはあなたには絶対出せない」という拒絶の言葉は、千尋の求めるものが、葉湯の符板や金なのではないということだけでなく、カオナシには内面が虚ろであることを見抜いていたからである。邪悪すらない。だから、千尋は、嘔吐して全てを棄却したカオナシが千尋に同行することを許すのである。その後、カオナシは、虚ろな内面に確かなものを少しずつ埋めていくことから始めていく。

三つ目の標識は、銭婆が与える千尋の同行者たち「みんなでつむいだ糸を編みこんである」髪止めである。銭婆は、「魔法で作ったんじゃ何にもならないからね」と言って千尋に手渡す。魔法は無から虚像を作り出す過剰（存在を超えたもの）である。銭婆の贈与は、止めおく絆である。両親との血縁、同行者が千尋に紡いだ織物、銭婆と千尋の一つの出会い。ハクと千尋の深遠で必然的な絆である。人は絆なしでは生きていけないことを髪止めが結んでいる。

V テーマ theme

物語は、構造的に不整合から整合に向かう基底接続によって成り立っている。この土台の上に建てられるプログラムは、探索的物語にせよ、救済的物語にせよ主体性をめぐる欠落や迫害の状況から始まる。乱された秩序や疎外状況を、主体は降りかかる試練を乗り越えて克服していく。そして、状況の復元がはかられたり、新たな秩序が構築される。それ故に欠落や欠乏の状況は物語の宿命である。

この物語は、善対悪とか侵入者と防衛者といった一般的な二元的価値観の対立に拠っていない。この物語もまたファンタジーの形態を取る以上二元的価値論に基づかざるを得ないが、その対立は欠乏と過剰と言う二項対立となっている。欠落と欠乏は、その除去を対象目的として物語を駆動させていく。両親の庇護にあるごくありふれた少女に突然降って湧いた恐るべき状況を生きることができない。受難は孤独ではあるが、必ずしも閉ざされたものではない。ハクは、千尋の遭遇した災厄の解除への道標を最初に示し、援助の手を差し延べる。ハクと千尋は遠い日の宿命な縁がある。千尋は幼き日、川に落ちて溺れそうになったところをハクに抱きとめられ助けられる。やがて、千尋が迫害を受け、傷ついたハクを真摯に救出するのは、この意識下に深く沈殿している記憶もあるからであろう。そして、記憶を甦らせ、ハクの本名の手がかりをハクに伝える。千尋とハクの出逢いのディスコースは、互いの苦難を助けあうという無償の贈与の交感と交換である。その心底には、人間性に対する相互主観が共有されている。苦悩や痛みは個人の感性であるが、それはまた分か合える感性である。絆で結ばれたこの相互主観的感性が主体たちに生きる力、勇気呼び起こす。この力は人としての根源的な生命力である。それはどのような人にも、子どもにも潜在的に漲っている。不慮な出来事によって阻外された主体は、内なる生命力を新たな絆によって相互主観的知力へ昇華させる。物語は、この勇気を生きることを伝える。

一方、過剰は欠乏をくつきりと照射させる相である。過剰は欲望の暴走であり、歪曲である。欲望は不足を求める。充足された欲望は満足を得る。しかし、時に欲望は欲望自体を二乗させ、過剰化する。過剰化された欲望は変質した欲望であり、欲望自体が新たな欲望を放出させていく。過剰化した欲望は満足が空転する欲望である。このとき、人は満足ということをとどめることができなくなる。利潤が常に新たな利潤を求めるように。それは利潤をフェティッシュとした欲望

である。この物語において、過剰は欠乏のディスコースを抑えこめ、耐えず自らの利益を保全しようとする。しかし、欠乏が対象を求めるエネルギー（勇気）は、これを差し止め、穴を穿ち、破碎する。

物語は、人間の生き方を辿り直し、例示し、暗示する。物語は現実の世界を物語の世界として組み立て直し、可能世界として構築する。この物語における過剰のディスコースはいわば大人たちの社会を反映させている過剰消費社会の相である。一方、欠乏のディスコースは未来を生きる、創出者の相である。そして、それを決意する者は受難と試練に会うが、それを克服するための決意と勇気、情念を相互主観として昇華し、互いの絆を結び合わせ、強化することで新たな地平を拓いていくことが可能となる。

文献リスト

引用文献

- 1) 角田巖「物語の連接的生成」文教大学『人間科学研究』第26号、2004年
- 2) Alan Dundes「民話の構造」池上嘉彦訳、大修館書店、1980（1964）年、p98
- 3) 宮崎駿「風の帰る場所—ナウシカから千尋まで」ロッキングオン、2002年、P223
- 4) 河合隼雄「昔話と日本人の心」岩波書店、1982年
- 5) 角田巖「プルビルによる物語読解」文教大学『人間科学研究』第14号、1992年

参考文献

Unbert Eco「物語における読者」篠原資明訳、青土社、1993（1979）年
A. J. Greimas「構造意味論 方法の探求」田島宏、鳥居正文訳、紀伊国屋書店、1988（1966）年
Jean-Michel Adam「物語論—プロップからエーコまで」末松壽、佐藤正年訳、白水社1992（1970）年
Julien Philippe「ラカン—フロイトへの回帰」向井雅明訳、誠信書房、2002年
「ユリイカ」2001年8月臨時増刊号、青土社

参考テキスト

宮崎駿監督「千と千尋の神隠し」スタジオジブリ（ビデオ）、2001年
同上「千と千尋の神隠し Spirited Away」（アニメーションコミックススペシャル）アニメージュ編集部、2001年